

生命システム研究センター アドバイザリー・カウンシル 2013

(平成 25 年 11 月 24 日～27 日 実施)

AC 報告書要旨 ※正文は英語

<概要>

QBiC は、生物学とエンジニアリング、物理学の間のインターフェースでの非常に学術的な研究所である。ここでは、特にシステム理論を伴った一分子、一細胞技術を通じて、生物学への新しい定量的アプローチの展開に焦点を当てている。この研究課題はタイムリーなものであり、日本における生物学的研究を非常に強めるものである。QBiC は 2.5 年しか経ていないにもかかわらず、世界最高水準の技術開発による最先端の基盤を確立している。また、強力なマネジメントにより明確な方向性を有している。さらに、理研内外や国際的な多くの連携がなされている。

<提言の概要>

1. AC は、阪大キャンパス内に新設される新しいビルのそばに追加的なスペースが利用できるようにすることを提言する。
2. AC は、プロジェクトに生物学の専門性を高める 3 人のチームリーダーを増やすことを提言する。
3. QBiC がうまく立ち上がった今、AC は、質の高い論文や国際会議での成果の発表普及などの優先度を高めることを提言する。
4. AC は、(若手) のユニットリーダーやチームリーダーのメンター制度を設けることを提言する。
5. AC は、あらゆるレベルで女性の研究者を増やすことを提言する。
6. AC は、国際的な PhD プログラムを設けることを提言する。
7. AC は、(優れた大学になった) ポスドクのプログラムを設けることを提言する。
8. AC は、AC が (PI ばかりではなく) 大学院生、ポスドク、研究員の代表とも将来会うことを提言する。

<AC 委員>

Jonathon Howard (Max Planck Institute of Molecular Cell Biology and Genetics)

David A. Case (BioMaPS Institute and Rutgers University)

Martin Fussenegger (ETH Zurich Department of Biosystems Science and Engineering)

中西 重忠 (公益財団法人大阪バイオサイエンス研究所)

笹井 理生 (名古屋大学大学院工学研究科)

近藤 孝男 (名古屋大学大学院理学研究科)

末松 誠 (慶應義塾大学医学部)